

## 暴力的ポルノグラフィー：女性に対する暴力、レイプ傾向、レイプ神話、及び性的反応との関係

大淵 憲一（東北大学）

**Violent Pornography: Its relationship with aggression against women, rape proclivity, rape myths, and sexual responses.**

**Ken-ichi OHBUCHI (Tohoku University)**

The present paper reviewed empirical research on the effects of violent pornography on male audience. Some laboratory research found that violent pornography depicting rape scenes increased male subjects' aggression against female targets, even when they were not angered by the victims. In other studies, the male audience of violent pornography showed more rape-supportive attitudes, that is, they perceived rape as less criminal and accepted more rape myths. These findings implied that it may increase rape proclivity in males. Rapists displayed more sexual arousal than non-rapists to rape scenes in several experiments, but some researchers held the assumption that the non-rapists were also aroused by rape scene but they inhibited their arousal because of a feeling of guilt. The majority of normal men really showed some similarities to rapists in cognitions or beliefs on women's sexuality and rape. In conclusion, it was alleged that sexual aggression is not a personal pathological problem but a socio-cultural issue which has much bearing on male dominant value system.

**Key words: Pornography, Rape, Rape Myths, Aggression, Sexual Response**

キーワード：ポルノグラフィー、レイプ、レイプ神話、攻撃、性的反応

### 1. はじめに

ポルノグラフィーとは、心理学的には、性的覚醒刺激のうち性描写刺激と呼ばれるものである。これは、性行為や異性の身体を描写した映像、写真、音声、文章などで、視聴者を性的に覚醒させるものである。

#### ポルノグラフィー論争

ポルノグラフィーが大量に消費されるようになった1960年代のアメリカでは、それが性犯罪（主として、レイプのような女性に対する暴力）の増加を促しているのではないかという声が高まり、ジョンソン大統領はこの問題を検討する研究委員会を作った。数多くの研究者を動員したこの委員会は1971年に報告書を提出したが、その結果は、ポルノグラフィーに顕著な反社会的影響は認められないというものだった（The Presidential Commission on Obscenity and Pornography, 1971）。しかし、この委員会の結論に対して心理学者たちの多くは疑問をもち、これがポルノグラフィーの影響に関する実証的な研究を盛んにするきっかけとなった。

#### 本稿の目的：暴力的ポルノグラフィーの影響

近年のポルノグラフィーの特徴は、レイプ・シーンを売物にするなど暴力的要素が濃厚になって来たことである（例えば、Eysenck & Nias, 1978/1983; Lowry,

Love, & Kirby, 1981）。しかし、ジョンソン研究委員会ではこうしたポルノグラフィーの内容分析は十分に行なわれていなかった。最近の研究では、暴力的ポルノグラフィーは非暴力的ポルノグラフィーに比べてはるかに強い反社会的影響があると言われている（例えば、Donnerstein, 1983; Malamuth, 1984）。そこで本稿では、このタイプの性描写刺激に焦点を当て、これを扱った心理学的研究を概観して、暴力的ポルノグラフィーの影響を検討しようとした。この種の研究はほとんどアメリカ、カナダなど北米地域で行なわれてきた。この文化圏は一夫一婦制で、レイプは社会的に犯罪とみなされている。一方、わが国ではポルノグラフィーに関する実証的研究はほとんど行なわれてこなかった。しかし、レンタル・ビデオの普及によってポルノグラフィーとの接触が容易になったことや女性問題への関心が高まってきたことから、この分野への関心も今後は増加するものと思われる。本稿は、日本の社会心理学者たちの注意を喚起し、あわせて、研究上有益と思われる理論と概念を紹介しようとするものである。

なお、暴力的ポルノグラフィーとはレイプなど性的暴力の描写を含むものをさす。一方、レイプとは「暴力や身体的威嚇によって女性に性行為を強いること」と定義される。レイプは性的逸脱のひとつだが、同性愛やフェ

ティンズムとは違って、他者の自由と人権を侵害し、被害者に身体的・心理的ダメージを与えるという点で、反社会的行動とみなされている。犯罪心理学では、単独犯のレイプと集団犯のレイプでは心理学的性質が異なると言われており、本稿では、主として個人的レイプを念頭に置いた。また、レイプ描写を含まない非暴力的なポルノグラフィーの影響については、筆者が別の論文でその心理学的効果を検討している（大淵、1990）。

## 2. 暴力的ポルノグラフィーと女性に対する暴力

ポルノグラフィーの性犯罪への影響を調べるといっても、レイプなどの犯罪行為を実験的に起こすことはできない。代わりに研究者たちが取り上げたのは、女性に対する攻撃行動である。女性に電撃を加えること自体に性的意味はないが、暴力という点では共通する反応である。そこでまず、暴力的ポルノグラフィーと対女性攻撃の関係を見てみよう。

### 攻撃行動への効果

図1はWisconsin大学のDonnerstein(1980a)が行なった実験の結果である。この実験では、男性被験者は男女いずれかの挑発者から怒りを喚起された。中性的フィ

ルム、性的フィルム、暴力的性的フィルムのうちどれかを見た後、被験者は挑発者に電撃を加える機会が与えられた。暴力的性的フィルムは、男性が武器で脅して女性をレイプする様子を描いたものであり、性的フィルムは男女間の合意セックスを描いたものである。その結果、被験者が怒っていない時にはフィルムの影響は見られなかったが、被験者が挑発者に対して怒っている場合は明らかに、暴力的性描写は非暴力的性描写よりも被験者を攻撃的にさせた。特に重要な点は、この図に示されているように、暴力的性描写が女性に対する攻撃を増加させたことである。非暴力的な性描写を見た被験者では女性に対する攻撃は増加しなかったのに、暴力的性描写を見た被験者では女性に対する攻撃が顕著に増加したのである。類似の結果は、Donnerstein(1980b)、Donnerstein & Berkowitz(1981)、Malamuth(1983)の実験でも観察された。

なお、この図では明瞭ではないが、対女性攻撃の増加は被害者に対して怒っていない被験者にも見られた。性的な要素を含まない暴力的フィルムについては、膨大な数にのぼる実験的研究が行なわれ、それらをレビューした論文も少なくない（例えば、Geen, 1983; Linz, Donnerstein, Bross, & Chapin, 1986; 大淵, 1980）。

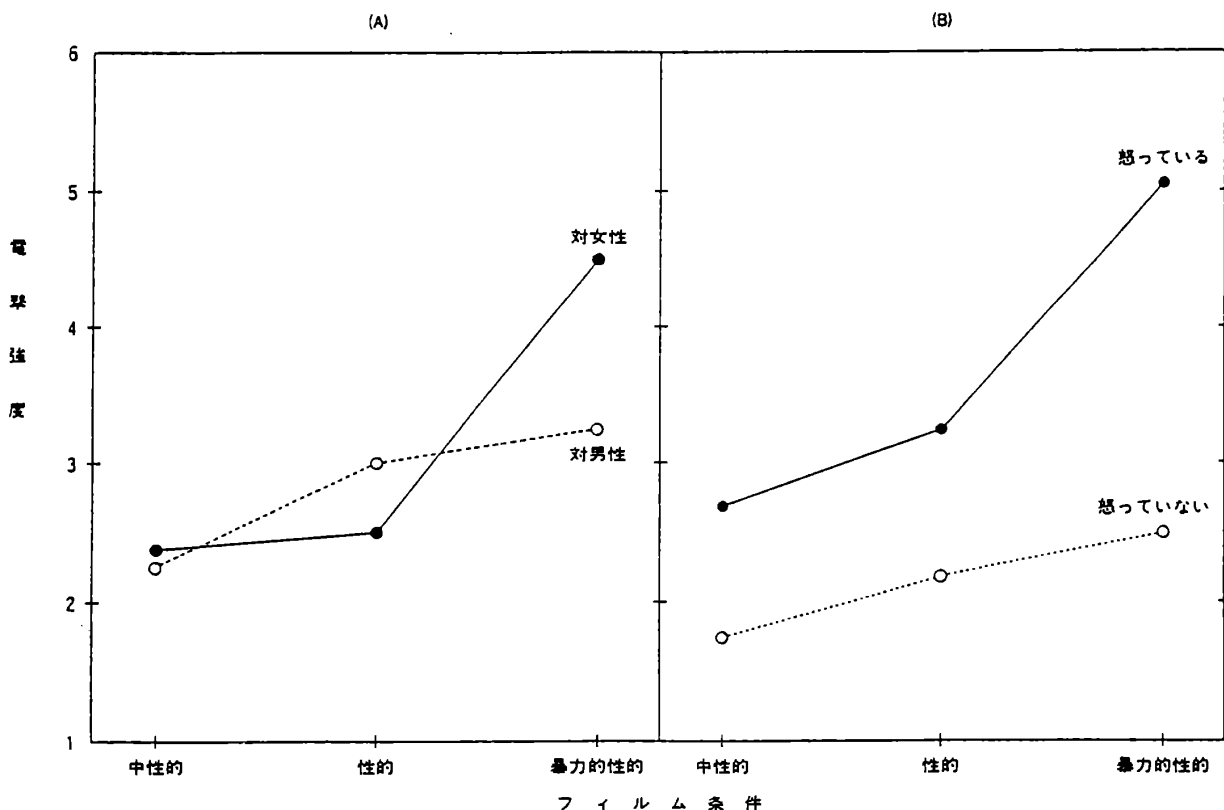


図1 暴力的ポルノグラフィーの攻撃反応への効果 (Donnerstein, 1980a)

(A): 標的の性別とフィルム・タイプの交互作用

(B): 被験者の怒りとフィルム・タイプの交互作用

それらによると、暴力的フィルムを見た被験者の攻撃反応が強められるのは、彼らは何らかの原因で怒りの状態にある場合であるというのが一般的な知見である。Donnerstein, Donnerstein, & Barrette (1976)、Turner & Layton (1976)、Zillmann & Johnson (1973) などの実験において特にこの点が明瞭に示された。こうした知見と比較して、暴力的ポルノグラフィが女性被害者に対して怒りをもっていない被験者にも攻撃を促すという結果は重視されるべきであろう。

**女性被害者の描写：苦痛反応か快反応か**

レイプを描いた実際の暴力的ポルノグラフィを分析した研究者たちは、それらに共通するひとつのテーマを見出した。それは、レイプされた女性被害者が、最後には性的快感を示すという物語パターンであった (Donnerstein & Berkowitz, 1981; Malamuth, Heim, & Feshbach, 1980)。女性が暴力を享受するフィルムを見た者は、女性に対する暴力を悪い行為とは感じなくなり、攻撃への抑制が低下するのではないかと考えられた。

反対に、被害女性が暴力に対して苦痛を示した場合はどうであろうか。この場合には暴力の罪悪視は強まり、攻撃は起こりにくくなると推測される。しかし、もしも視聴者が女性に対して怒りを喚起されていたらどうであろうか。女性への攻撃願望を持っている視聴者の場合は、フィルムに示された被害女性の苦痛は攻撃への報酬と映るかもしれない。このときには、従って、被害女性の示す苦痛が攻撃を誘発する手がかりになることも考えられる。

この点に的を絞った研究が Donnerstein & Berkowitz (1981) によって行なわれた。レイプされている間じゅう女性被害者が苦しみ続ける映像と、レイプされた女性がやがて快反応を示すフィルムを作り、男性被験者が示す攻撃反応を比較した。まず、暴力的要素を含むポルノグラフィを見た被験者にのみ対女性攻撃が強かったことは、既にみた Donnerstein (1980a) の結果と同じだった。図2の(B)を見ると、怒った被験者は、レイプの被害者が快を示しても苦痛を示しても、女性挑発者に対して強い攻撃を行なった。しかし、怒っていない被験者では、レイプ被害者が快を示した場合にだけ攻撃の増加が見られた。

この結果は、女性被害者の示す反応が男性視聴者の対女性攻撃を規定する重要な要因であること、また、女性被害者が快を示した時と苦痛を示した時では、攻撃促進に違ったメカニズムが考えられることなどを示唆している。特に、怒っていない視聴者を攻撃的にするのはレイプ被害者の快反応描写であり、こうした描写を含む暴力的ポルノグラフィには非常に危険な面があることが指摘されよう。

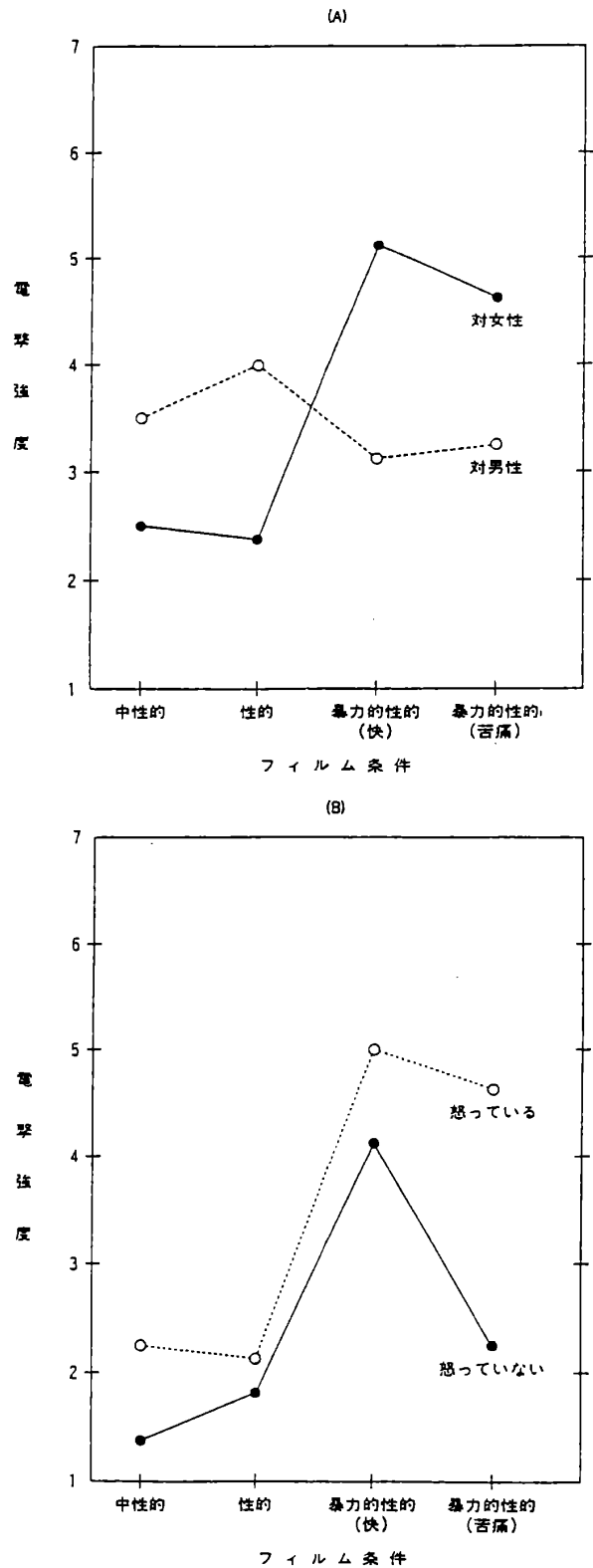


図2 描写されたレイプ被害者の反応と被験者の攻撃反応 (Donnerstein & Berkowitz, 1981)  
 フィルムのうち「暴力的性的(快)」とはレイプ被害者の性的快を描いたもの、「暴力的性的(苦痛)」とはレイプ被害者の苦痛だけを描いたもの。  
 (A): 標的の性別とフィルム・タイプの交互作用  
 (B): 被験者の怒りとフィルム・タイプの交互作用

### いくつかの仮説

暴力的ポルノグラフィーがなぜ対女性攻撃を促すのか。これについて、現在、いくつかの仮説が提案されている。この中には、視聴者が怒っていて既に攻撃に動機づけられている場合にのみあてはまる仮説もあるが、この点についてはまだ不明確なものが多い。

(1)抑制低下 攻撃事象の観察は一般に観察者の攻撃抑制を低下させやすいと言われる(Bandura, 1973)。女性に対する攻撃には道徳的抑制がはたらいいて、通常の状態では、男性被験者は女性に対する攻撃を抑えがちである(例えば、Taylor & Epstein, 1967)。しかし、女性に対する暴力を観察することは、被験者のこうした攻撃抑制を低下させる可能性がある。この仮説は、被験者が特に女性に対して怒りや敵意をもっている場合にあってはまりそうである。

(2)攻撃手がかりとプライミング Berkowitz(1974)の古典的な攻撃理論に、怒りや攻撃反応と連合した刺激が攻撃を誘起するという攻撃手がかり説がある。これによると、女性が暴力を受けるシーンを観察すると、女性的特徴が攻撃手がかり性を帯び、現実の女性標的に対する攻撃が強められると予想される。この現象は、最近の社会的認知論でしばしば強調されているプライミング効果に似ている。この考えに立つと、暴力的映像を見た被験者には暴力的な認知スキーマや行動スクリプトが喚起され、攻撃反応を発動しやすい情報処理経路が活性化される(Berkowitz & Heimer, 1989)。

(3)苦痛の報酬 怒っている人は挑発者を苦しめてやりたいという願望をもつ。女性挑発者に怒りを喚起された被験者に、女性が暴力によって苦しめられる映像を見せると、それは代理強化となり、被験者の攻撃は促進されるであろう(Bandura, 1973)。これは明らかに怒りの状態にある視聴者の行動にあてはまる。

(4)罪悪感の低下 女性被害者が逆に快を示すと、その場合には既に述べたように、視聴者の側の暴力に対する罪悪感が低下すると予想される。女性が暴力を受容すると視聴者は思うからで、これが対女性攻撃を促すのであろう。怒っていない男性をも攻撃に向わせる強力な攻撃促進要因は女性被害者の快反応と考えられる。

(5)レイプ傾向の助長 被験者の攻撃反応に性的動機が含まれていたかどうかは明らかではないが、レイプの被害者が性的快を示すことはさらに重大な問題を含んでいる。女性の性的快反応は多くの場合男性に性的満足をもたらすものであるから、この種のポルノグラフィーは、暴力や強制によって性的満足を得る手段があることを男性視聴者に学習させる機会を提供している。

### 生態学的妥当性

実験室の中で女性に電撃を加えることは、実生活ではどのような行動にあたるだろうか。実験室では、教示な

ど、被験者が他者に電撃を加えることを正当化する条件が存在するので、実験的攻撃と実際の攻撃の行動を等価に見ることは慎重でなければならない。しかし、実験的攻撃から実生活での被験者の攻撃行動を予測できるといふいくつかの研究結果もあり(Bertilson, 1983)、こうした測度の妥当性はある程度認められている。この場合もっと重要な批判は、実験的攻撃はレイプのような性的暴力とは本質的に異質な反応であり、ポルノグラフィーと性犯罪の関係を検討するには不向きではないかという意見であろう。この指摘はその通りだが、しかし、後に見るように、対女性攻撃がレイプ傾向をもつ男性に特に強く見られるなど、レイプと対女性攻撃の関連性を示唆する証拠もあり(Malamuth, 1981, 1983)、そうした点から見て、ここで紹介された実験的攻撃研究の意義は必ずしも否定できない。

### 3. 暴力的ポルノグラフィーとレイプ神話

#### レイプ神話とは何か

暴力的ポルノグラフィーにはしばしば、レイプされた女性が性的な快を示すと言うエピソードが含まれている。しかしこのエピソードは、実は、まったくのフィクションであることが女性問題研究者によって指摘されている(Brownmiller, 1975; Burt, 1980; MaCkwellar, 1975/1976)。実際のレイプ事件を調べて見ると、被害者が性的快を経験したという例はほとんどない。被害女性はレイプによって恐怖や屈辱感や身体的な苦痛を経験し、また、その精神的後遺症に苦しむ者も少なくない。レイプを女性が享受するというエピソードは女性に関する根拠のない信念に基づいている。この信念はレイプ神話(rape myths)とよばれている。

レイプ神話はレイプを合理化する複合的な信念であるが、その核となる信念は、「女性が暴力的性を好む」とか「女性は潜在的にレイプされることを望んでいる」という誤った女性性の観念である。こうした信念の強さを調べる尺度がBurt(1980)によって作られ、広範囲に利用されてきた。これはレイプ神話受容尺度(RMA)とよばれ、アメリカではBurt(1980)やField(1978)たちが、カナダではMalamuth, Check, & Briere(1986)が、イギリスと西ドイツではKrahéが(Krahé, 1985, 1988)、さらに我が国では大淵・石毛・山入端・井上(1985)がこの尺度を使った研究を行なっている。その結果、どの標本でも、回答者の半数以上の者が何等かの意味でのレイプ神和的な信念を持っていることが示された。

これらの研究の大半において、レイプ神話信念は女性より男性の方に強く見出されている(Burt, 1980; Malamuth et al., 1986; Jenkins & Dambrot, 1988; 大淵ほか, 1985)。そのことは、ポルノグラフィーにレイプ神話が頻繁に登場する背景条件として、消費者である男

性視聴者の側にそれを受入れる認知的下地があることを示唆している。

### 暴力的ポルノグラフィによるレイブ神話の強化

レイブ神話的なポルノグラフィを見ることによって視聴者のレイブ神話が強化される可能性はないのだろうか。UCLAのMalamuthたちは一連の研究によって、暴力的ポルノグラフィが男性の対女性攻撃を増加させるだけでなく、レイブに関連したいくつかの社会的態度や信念にも影響することを明らかにした(例えば、Malamuth, 1981a, 1984; Malamuth & Briere, 1986; Malamuth & Check, 1985a)。

**相関的研究** Malamuth(1986)、Check(1984)は男子大学生がどれくらいポルノグラフィを利用しているかを調査し、レイブ神話信念との関係を見た。その結果、性描写の多い雑誌をよく読む男子学生には、女性が性的強制を好むという信念を持つ者が多かった。また、男子大学生と男生犯罪者(性犯罪者を含む)合せて145名を対象にRMAを測定した大淵ほか(1985)では、ポルノグラフィとの接触頻度とRMAとの間に低いが有意な正の相関が見られた( $r = .19$ )。これらはポルノグラフィ接触とレイブ神話信念の関連を多少なりとも示唆しているが、もちろんこれらは相関的な研究なので因果関係は確定できない。ポルノグラフィを見るのがレイブ神話を強めているのかもしれないし、逆に、そうした信念を持つ者が好んでポルノグラフィを見るのかもしれない。おそらく双方の因果関係が存在するのであろうが、特にポルノグラフィによるレイブ神話強化の可能性を探るには実験的な検討が不可欠である。

**実験室研究** Malamuthたちは、暴力的ポルノグラフィの視聴者にレイブや女性性に関する認知が変化するかどうかを調べるためにいくつかの実験を行なった(Malamuth & Check, 1980a; Malamuth & Check, 1985a)。

Malamuth & Check(1985a)は組織的に性描写刺激を作成した。セックスが合意かレイブか、女性被害者が苦痛を示すかどうか、女性被害者が性的快を示すかどうかの3要因の組合わせで8種類の音声刺激を作った。男性被験者にこのどれかを聞かせた後で、さらにレイブ描写を聞かせ、これについて女性被害者の苦痛や快などを評定させた。更に、もっと一般的に「女性の何%がレイブを楽しむか?」と質問した。その結果、レイブされた女性が快を示す性描写を聞いた被験者は、不快を示す性描写を聞いた被験者よりも、後で聞いたレイブ被害者の快を強く評定し、また、一般的により多くの女性がレイブを楽しむだろうと答えた。ポルノグラフィ視聴によるレイブ神話の強化は、もともとレイブ傾向(次節参照)の強い男性に顕著に起こるという結果もある(Malamuth & Check, 1981a)。

**フィールド実験** さらにMalamuth & Check(1981b)

はフィールドでの実験も試みた。大学生男女146名をランダムに2群に分け、実験群には女性が性的暴力の被害者となり、しかもその女性が快を示す劇場映画の入場券を配った。統制群の学生たちには、暴力を含まない穏やかな性描写の恋愛映画の入場券を配った。その際、学生たちには「映画評価の研究である」と説明した。入場券はいずれも2日間だけ有効にして、被験者の映画視聴期間を統制した。その数日後、実際にこれらの映画を見た115名の学生たちにレイブ神話質問紙を実施したところ、統計的に有意ではなかったが、実験群の男性ではRMA得点が増加した。女性にはそうした変化は見られなかった。

これらの実験はいずれも、レイブ神話を描いたポルノグラフィを見ることによって、視聴者特に男性視聴者のレイブ神話信念が強められることを示唆している。こうした面での影響をMalamuth(1984)は次のようにまとめている。暴力的ポルノグラフィ、特に女性被害者の快を描いたポルノグラフィを見た男性は、(1)レイブに対して特に悪いことや異常なことは思わなくなり、レイピストに寛容になる、(2)女性が被レイブ願望を持っているなどレイブ神話信念が強くなる、(3)レイブ空想が活発になる、(4)レイブ傾向が高まる。最後の点(レイブ傾向)については次節で更に論ずる。

## 4. ポルノグラフィと性犯罪

### ポルノグラフィに対するレイピストの反応

ポルノグラフィを見て被験者がどのくらい性的に覚醒したかは、従来は、言語報告かあるいは心拍・血圧変化などの生理学的指標を用いて調べられて来た。しかし、最近では、直接に性器の変化を測定する方法が試みられている。その装置は、男性器に直接ストレーン・ゲージを装着し、容積脈波計(plethysmography)によって膨張度を測定するものである(Bancroft, Jones, & Pullen, 1966)。この方法を用いてポルノグラフィに対するレイピストの性的反応を探る研究がいくつか行なわれてきたが、その結果には、本稿の主旨からみて興味深いものが少なくない。

**性的選好説** Quinseyらは、暴力的ポルノグラフィ(レイブ・シーン)と非暴力的ポルノグラフィ(合意セックス・シーン)を見せながら、性犯罪者と大学生(いずれも男性)の性器変化を測定した(Quinsey, Chaplin, & Upfold, 1984; Quinsey, Chaplin, & Varney, 1981)。その結果、大学生は合意セックス・シーンには強い性的覚醒を示したが、レイブ・シーンに対する性的覚醒は弱かった。一方、レイピストは逆に、正常なセックスに対しては性的覚醒を示さず、レイブ・シーンの方に強い覚醒を示した。この研究結果は、レイピストと非レイピストが、違ったタイプの性的欲望をもっているとい

う性的選好説 (sexual preference theory) を産んだ。

**性的抑制説** しかし、これとは違った測定結果もある。Abel, Barlow, Blanchard, & Guild (1977), Barbaree, Marshall, & Lanthier (1979) らの研究では、非レイピストの反応は Quinsey らの場合と同じで、合意セックス・シーンにのみ性的覚醒を示したが、レイピストはレイプ・シーンと合意セックス・シーンのどちらにも強い覚醒を示した。この結果は、レイピストが正常なセックスには興味を示さないという選好説には合致しなかった。また、この研究では、両群の違いは非レイピストがレイプ・シーンに性的覚醒を示さなかった点だけである。この結果を Marshall & Barbaree (1984) は次の様に解釈した。非レイピスト即ち一般の男性も、実はレイプ・シーンを見て性的に喚起されるのではないか。しかし彼らは自分がレイプ・シーンを見て性的に覚醒するということが罪悪感を感ずるので、その性的覚醒を自ら抑制するのではないかと。この考え方は性的抑制説 (sexual inhibition theory) とよばれる。この説によると、レイピストも非レイピストも同じ様にレイプに対する性的関心を持っているが、非レイピストはそれを抑制し、レイピストは抑制しないという点が異なることになる。

抑制説を支持する他の証拠としては、アルコールを摂取していたり (Barbaree, Marshall, Yates, & Lightfoot, 1983)、怒りを喚起されていたりして (Yates, Barbaree, & Marshall, 1984)、被験者の抑制が緩んでいると、非レイピストもレイプ・シーンに強い覚醒を示すという研究結果が挙げられる (Blader & Marshall, 1984)。

**女性被害者の反応** レイプ・シーンに対する視聴者の性的反応においてもレイプ被害者の反応が重要であるという指摘がある。多くの研究において、レイプ被害者が快反応を示した時にはレイピストも非レイピストもともに強い性的覚醒を示し、一方、女性被害者が苦痛を示した時に性的覚醒を示すのはレイピストだけである、という報告がなされている (Malamuth, 1981b, 1984; Malamuth & Check, 1983; Malamuth & Donnerstein, 1982; Malamuth, Haber, & Feshbach, 1980; Malamuth, Heim, & Feshbach, 1980)。この結果は、選好説でも抑制説でも解釈可能である。選好説では、被害者の苦痛に性的覚醒を感ずる点にレイピストの性的欲望の特殊性があることになる。しかし、被害者の苦痛によって非レイピストに罪悪感が強く喚起され、彼らの性的覚醒が抑制されると抑制説で解釈することも可能である。

**レイプへの関心は正常なものか** この問題についてはまだ決着はついていない。しかし、一般の男性も性犯罪歴を持つレイピストと同様にレイプに対する性的関心があると主張する性的抑制説は、少なくとも、レイピストと一般人が質的に異なった人間であると見ることに疑

問を呈するものである。既に述べたように、レイプ神話が多く男性に共有されている事実と突き合せてみると、抑制説の主張は必ずしも不合理ではない。しかし、だからといってすべての男性が女性にとって危険であることにはならない。抑制説が強調するように、むしろ重要なのは自己抑制である。我々は、レイプへの関心を多くの男性が潜在的にもっていることを認めた上で、それを彼らがどのようにコントロールしているかを検討していく必要がある。

**レイプ指数** いずれにしても、ポルノグラフィーに対する性的覚醒の違いが男性のレイプ傾向を反映するという現象は興味深い。これをレイプ指標 (rape index) として、レイプ傾向の測定に使おうと提案する研究者もいる (Abel et al., 1977; Malamuth, 1981a; Malamuth & Donnerstein, 1982)。この場合、〔レイプ・シーンに対する性的覚醒〕／〔合意セックス・シーンに対する性的覚醒〕の比をとり、その数値の大きさをレイプ傾向の強さとみなす。

#### 身近なレイピストたち

**自己報告されたレイプ可能性** レイプ傾向を測定するもっと簡便な方法もよく用いられた。Malamuth たちは、「逮捕されたり、罰せられたりする恐れが絶対はないとしたら、レイプを行なうと思うか」と男性被験者に聞いて、自分がレイプを実行する可能性を5段階で答えさせた。段階1は「絶対にしない」、段階5は「きつとする」である。この測定はレイプ可能性の自己報告 (self-reported likelihood of raping: LR) とよばれる方法である。Malamuth たちは、大学生や一般市民を対象に多くの人々からLR回答を集めた結果、男性回答者の約35%が「レイプを絶対しないとは言い切れない」(段階2以上の回答)と答えたことを見出した。この結果を見ると、アメリカ、カナダの男性の1/3は「罰せられないならレイプするかもしれない」ことを認めており、罰がなければレイプを実行する可能性を持っていると考えることができる (Malamuth, 1981a; Malamuth, Haber, & Feshbach, 1980; Malamuth & Check, 1980b, 1983; Tieger, 1981)。

Malamuth たちはまた、レイプのような犯罪行為ではなく、もっと穏やかな性的強制の傾向についても測定を試みた。性的強制とは「レイプのように暴力は用いないが、様々の圧力を用い、女性に対して意思に反した性行為を強いること」である。これを先のレイプ傾向に関する質問に加えて、「罰せられる恐れが絶対はないとしたら、女性に性行為を強制すると思うか」と聞き、やはり、可能性を5段階で自己報告させるものである。Briere & Malamuth (1983) が356名の男子大学生の回答を分析したところ、「レイプをするかもしれない」と答えた者が28%、「レイプはしないが性的強制はするかもしれな

い」と答えた者が30%いた。一方、レイプや性的強制は絶対しないと答えた者は40%に過ぎなかった。このような結果は、異性関係において、状況によってはレイプや性的強制に向う傾向が非常に多くの男性に存在することを示している。

**レイプ傾向の心理学的特性** レイプ傾向をもつ男性がもたない男性と比べてどのような心理学的特徴を持つか、特に、犯罪的レイピストとの共通点はどうかといった点についても Malamuth たちは検討している。その結果、レイプ傾向者はレイプやレイピストに対して寛容で、またレイプ神話を信ずる傾向が強かった (Malamuth & Check, 1980b; Malamuth et al., 1980; Tieger, 1981)。また、彼らはレイプ・シーンを含む暴力的ポルノグラフィーを見て低レイプ傾向者よりも強い性的覚醒を示した (Check & Malamuth, 1983; Malamuth & Check, 1980a, 1981b, 1983; Malamuth et al., 1980)。こうした特徴は犯罪的レイピストと共通するもので、そのことはレイプ傾向の自己報告がある程度の妥当性をもつことを示している。

更に、高レイプ傾向者は、女性との交際において実際に性的強制を行った経験が多くあり (Malamuth & Check, 1981a; Koss & Oros, 1982)、実験室に於ける攻撃実験でも、女性挑発者に対してより激しい攻撃を示すことが見出されている (Malamuth, 1984)。レイプはしないが性的強制傾向のある男性にも、これに準ずる特徴が見られた (Briere & Malamuth, 1983)。つまり、彼らはレイプ傾向を持つ男性と、レイプ傾向も性的強制傾向も持たない男性のちょうど中間の性質を示した。こうした様々の実証的な資料から見ると、一般人のなかのレイプ傾向者は、レイプ行動や対女性攻撃と関連する特徴を多くもつ人々であり、犯罪的レイピストとの心理学的類似性をもつ人々であると言える。

**デート中の性的強制** レイプというと、女性が山中で暴漢に襲われた事件などを連想するが、実際のレイプ事件はかなりの割合が知人どうしの間で起こっている。例えば、日本での調査では強姦事件の46%において被害者と加害者は知合いだった (佐藤・杉原, 1978)。犯罪ではないが、デート中の男女の間でも、暴力や威嚇を用いたレイプに近い性的強制がしばしば起こっていることがいくつかの調査で指摘されている (Burkhart & Stanton, 1988)。例えば、Kossらによる大規模な調査によると (Koss, 1985; Koss & Oros, 1982)、約2000名の女子大学生のうち32%は、デート中に男性からセックスを強制された経験があった。そのうち、13%は脅しや暴力を受けていた。一方、男子学生に対する同様の調査でも、数字はこれよりもやや低い、女子学生の回答を裏付ける性的強制が報告された (Koss & Oros, 1982)。

こうした調査結果は、一般の人々の間でもレイプに近

い性的強制がかなり頻繁に起こっていることを示している。それらの中には女性が訴えれば犯罪となるケースも少なくないようである。こうした事実も、レイプ神話の遍在性と合せて、性的攻撃が個人病理的な問題ではなく、社会的背景をもつ一般的な問題であることを暗示している。

### 性的攻撃の社会・文化的背景

**レイプ文化** Kanin(1969)の調査では、約400名の男子学生のうち25.5%が性的攻撃の経験があると答えた。こうした男性の性的強制傾向の強さを Kanin は、男性集団内の性的競争のせいではないかと考えた。

最近むしろ、性的攻撃は男性による女性支配の手段であるという主張が行なわれている。例えば、Brown-miller (1975)、Burkhart & Stanton(1988)は、西欧文化にはレイプを暗黙のうちに支持する態度や信念があると主張して、これを「レイプ文化」とよんだ。レイプ神話などがその中核となる信念であるが、これらの研究者たちは、レイプ文化とは男女間の社会的勢力の不均衡を維持する手段として機能するもので、性的攻撃は「すべての女性にすべての男性を恐れさせる性支配の威嚇である」とさえ言う (Brownmiller, 1975, p.15)。

多くの男性にレイプ支持的な信念 (例えば、レイプ神話) が存在することはレイプ文化を暗示するものではある。Koss, Leonard, Beezley, & Oros(1985)、Rapaport & Burkhart(1984)は、デート中の男性による性的強制と、彼らの人格、態度、性経験などに関する多くの変数との関連を調べた。その結果、性的攻撃性と個人病理の間には有意な関連は見出されず、強い関連を示したのは、性的強制の礼賛、女性に対する暴力や敵意など、レイプ神話とその周辺的な信念群だった。こうしたことから、性的強制はもちろん個人の問題ではあるが、それが女性蔑視的な男性文化の価値システムに基づいている以上、これは重要な社会文化的問題であるとの研究者たちは主張した。

**性的強制の社会的文脈** デートなど親しい男女間にかかる性的攻撃の場合は、別の種類の社会的要因がはたっているようである。デート場面にも他の社会的場面と同様に社会的スクリプトがあり、それがデート中の男女に性的交渉をいつどのように始めるべきかガイドするものとなっている。そのスクリプトでは、男性は性的に積極的であることが期待され、女性は反対に、男性の性的誘惑に抵抗することが期待されている。こうした性行動に関する男女別の基準については大学生男女の95%がそれを認め、自分もそれに基づいて行動していると答えた (LaPlante, McCormick, & Brannigan, 1980)。

このスクリプトから見ると、男性も女性も、男性はセックスを攻撃的に迫る役割を演じ、女性はそれに抵抗する役割を演じるだろうと、互に予測しながらデート

に臨むことになる。このような期待が存在する文脈では、女性が性的抵抗を示しても、それが額面通りには受取られず、「本心からの抵抗ではない」と男性が割引原理に従った解釈をしても不思議ではない。男性自身には積極的な役割が期待されているとすれば、なおのこと、この男性が強引な性的アプローチをする可能性は高くなる。Burkhart & Stanton(1988)や Jenkins & Dambrot(1987)は、性的交渉におけるこうした男女間のスキプトの違いが親しい男女間の性的強制を生み出すひとつの要因ではないかと述べた。

#### ポルノグラフィー視聴とレイプ傾向

ポルノグラフィー論争の出発点は、ポルノグラフィーが性犯罪を促すかどうかという疑問であった。レイプ行動を実験的に起こすことはできないので、暴力的ポルノグラフィーとレイプ行動の因果関係を直接的に確認することは困難であると、先にも述べた。しかし、両者の関係を示唆する間接的な証拠は数多く報告されてきた。まず、暴力的ポルノグラフィーを見た男性には対女性攻撃が増加したが(Donnerstein, 1980a; Donnerstein & Berkowitz, 1981)、一方、レイプ傾向の高い男性には対女性攻撃が強く見られた(Malamuth, 1983)。また、暴力的ポルノグラフィーを見た男性にはレイプ神話信念が強まるが(Check, 1984; Malamuth & Check, 1980a, 1981a, 1981b, 1985a, 1985b; 大淵ほか, 1985)、一方、レイプ傾向の高い男性はレイプ神話を強く信じていた(Malamuth, 1986; Malamuth & Check, 1980a; Malamuth et al., 1980; Tieger, 1981)。

Demare, Briere, & Lips(1988)は、200名余の男子大学生について質問紙によって、ポルノグラフィー視聴経験、性的態度、レイプ傾向などを測定した。過去1年間に、学生の81%は非暴力ポルノグラフィーを、35%は暴力的ポルノグラフィーを見たことがあった。従って、かなりの割合の男性がポルノグラフィーを見ていることになる。この調査では、レイプ可能性の自己報告も得られた。その結果、レイプ傾向のある男性は暴力的ポルノグラフィーをよく見ていたことが分かった。もちろん、この調査から因果関係は結論できないが、先に述べた間接的な証拠と付き合わせてみると、ポルノグラフィー、特に暴力的なポルノグラフィーがレイプなどの性犯罪傾向を助長していると言えるかもしれない。

#### 5. 結論と展望

1971年のジョンソン研究委員会の報告書に端を発したポルノグラフィー論争によって、ポルノグラフィーの心理社会的影響に関する実証的研究が盛んになった。中でも、レイプ・シーンなど暴力的要素を含む性描写には、いくつかの反社会的影響が見られた。それはまず、男性視聴者の女性に対する攻撃を促した。特に、怒っていな

い冷静な視聴者をも攻撃的にしたことは、暴力的ポルノグラフィーの危険な側面と言えよう。また、暴力的ポルノグラフィーには、視聴者をレイプに対して寛容にしたり、レイプ神話を信じやすくさせるなど、性犯罪に対して親和的な態度を強める傾向がみられた。こうした暴力的ポルノグラフィーの有害な要素は、もちろん、描かれた女性に対する暴力であるが、特に女性被害者がレイプを享受しているかのように描写されている点が問題であった。

レイプ・シーンに対してレイピストが強い性的覚醒を示すことが見出された。しかし、一般の男性にとっても、レイプ・シーンはやはり性的覚醒をもたらすものではないかという見解もある。また、レイピストによく似た心理的特徴を持つ人々が、一般の男性の中にもかなりの割合で存在するようであり、そうした点から見て、性的強制やレイプは特定の男性の病理的問題ではなく、多くの男性に関連のある社会的現象であると言えよう。しかし、もちろん、現実にはレイプや性的強制を行なうかどうかは決定的な差であり、この違いを明らかにすることも、この分野の重要な課題である。

以上のことを踏まえて今後の研究方向を示すとすれば、まず第一に、ポルノグラフィーと性犯罪の実際的な関連をもっと明らかにする犯罪心理学的検討が必要であろう。これは実験室的知見の生態学的妥当性を検証するものでもある。第二に、ポルノグラフィーの影響を左右する個人的条件の検討もまだ十分ではない。本稿で紹介した研究の大半は大学生を対象にしたものだが、それ以外のサンプルではどうであろうか。青少年など若年者ほど影響は強いのだろうか。レイプ神話が真実でないとしたら、実際の性経験はポルノグラフィーの影響を無効にするのだろうか。こうした個人要因についても現在のところ実証的な資料は不足している。最後に、なぜレイプ神話が男性に好まれるのか、男性の性心理の分析も重要な研究テーマとなるであろう。女性解放運動の観点から単にレイプ神話を非難するだけでなく、こうした偏った信念がなぜ多くの男性にもたれるのかも考えて見る必要がある。これはポルノグラフィー論争を超えた深い人格・社会的問題を内包している。パーソナリティの発達と病理あるいは文化的ステレオタイプなど、多角的なアプローチの必要な問題である。

なお、巻頭で述べたように、本稿で取り上げた研究の大半は北米のものなので、それらの理論や知見がそのまま日本人にもあてはまるとは言えない。わが国の性犯罪が欧米諸国に比べて少ないのは事実だし、性に対する文化的態度の違いも無視できないと思われる。しかし、レンタル・ビデオの普及などから見て、ポルノグラフィーの影響がわが国に現れるとすればおそらくこれからであり、ここで取り上げた様々の知見は、今後わが国でも研



究を進めるにあたって、重要な仮説となるべきものであろうと思われる。

### 引用文献

- Abel, G.G., Barlow, D.H., Blanchard, E., & Guild, D., 1977, The components of rapists sexual arousal. *Archives of General Psychiatry*, 34, 895-903.
- Bancroft, J. H. J., Jones, H. G., & Pullen, B. R., 1966, A simple transducer for measuring penile erection with comments of its use in the treatment of sexual disorder. *Behavioral Research and Therapy*, 4, 230-241.
- Bandura, A., 1973, *Aggression: A social learning analysis*. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall.
- Barbaree, H. E., Marshall, W. L., & Lanthier, R. D., 1979, Deviant sexual arousal in rapists. *Behavioral Research and Therapy*, 17, 215-222.
- Barbaree, H. E., Marshall, W. L., Yates, E., & Lightfoot, L. O., 1983, Alcohol intoxication and deviant sexual in male social drinkers. *Behavioral Research and Therapy*, 21, 365-373.
- Berkowitz, L., 1974, Some determinants of impulsive aggression: The role of mediated associations with reinforcements for aggression. *Psychological Review*, 81, 165-176.
- Berkowitz, L. & Heimer, K., 1989, On the construction of the anger experience: Aversive events and negative priming in the formation of feelings. L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol. 22. Pp.22-37.
- Bertilson, H. S., 1983, Methodology in the study of aggression. In R. G. Geen & E. I. Donnerstein (Eds.), *Aggression: Theoretical and empirical reviews*. Vol. 1: *Theoretical and methodological issues*. New York: Academic Press. Pp.213-245.
- Blader, J. C. & Marshall, W. L., 1984, The relationship between cognitive and erectile measures of sexual arousal in non-rapist males as a function of depicted aggression. *Behavioral Research and Therapy*, 22, 623-630.
- Briere, J. & Malamuth, N.M., 1983, Self-reported likelihood of sexually aggressive behavior: Attitudinal versus sexual explanations. *Journal of Research in Personality*, 17, 315-323.
- Brownmiller, S., 1975, *Against our will: Men, women and rape*. New York: Simon & Schuster.
- Burkhart, B. R. & Stanton, A. L., 1988, Sexual aggression in acquaintance relationships. In G. W. Russell (Ed.), *Violence in intimate relationships*. New York: PMA.
- Burt, M. R., 1980, Cultural myths and support for rape. *Journal of Personality and Social Psychology*, 38, 217-230.
- Check, J. V. P., 1984, *The effects of violent and nonviolent pornography* (Contract No 95SV19200-3-0899). Ottawa, Ontario: Canadian Department of Justice.
- Check, J. V. P. & Malamuth, N.M., 1983, Sex-role stereotyping and reactions to stranger vs. acquaintance rape. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, 344-356.
- Demare, D., Briere, J., & Lips, H.M., 1988, Violent pornography and self-reported likelihood of sexual aggression. *Journal of Research in Personality*, 22, 140-153.
- Donnerstein, E., 1980a, Aggressive erotica and violence against women. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 269-277.
- Donnerstein, E., 1980b, Pornography and violence against women. *Annals of the New York Academy of Sciences*, 347, 277-288.
- Donnerstein, E., 1983, Erotica and human aggression. In R. G. Geen & E. I. Donnerstein (Eds.), *Aggression: Theoretical and empirical reviews*. Vol. 2: *Issues in research*. New York: Academic Press. Pp.127-154.
- Donnerstein, E. & Berkowitz, L., 1981, Victim reactions in aggressive erotic films as a factor in violence against women. *Journal of Personality and Social Psychology*, 41, 710-724.
- Donnerstein, E., Donnerstein, M., & Barrett, G., 1976, Where is the facilitation of media violence: The effects of nonexposure and placement of anger arousal. *Journal of Research in Personality*, 10, 386-398.
- Eysenck, H. J. & Nias, D. K. B., 1978, *Sex, violence and the media*. London: Carol Heaton. (岩脇三良(訳)、1983、『性・暴力・メディア』新曜社。)
- Field, H. S., 1978, Attitudes toward rape: A comparative analysis of police, rapists, crisis counselors, and citizens. *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 156-179.
- Geen, R. G., 1983, Aggression and television vio-

- lence. In R. G. Geen & E. I. Donnerstein (Eds.), *Aggression: Theoretical and empirical reviews. Vol. 2: Issues in research*. New York: Academic Press. Pp.103-125.
- Jenkins, M. J. & Dambrot, R., 1987, The attribution of date rape: Observer's attitudes and sexual experiences and the dating situation. *Journal of Applied Social Psychology*, 17, 875-895.
- Kanin, E. J., 1969, Selected dyadic aspects of males sex aggression. *Journal of Sex Research*, 5, 12-28.
- Koss, M. P., 1985, The hidden rape victim: Personality, attitudinal, and situational characteristics. *Psychology of Women Quarterly*, 9, 193-212.
- Koss, M. P., Leonard, K. E., Beezley, D. A., & Oros, C. J., 1985, Nonstranger sexual aggression. *Sex Role*, 12, 981-992.
- Koss, M. P. & Oros, C. J., 1982, Hidden rape: A survey of the incidence of sexual aggression and victimization on a university campus. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 50, 445-457.
- Krahé, B., 1985 Verantwortungszuschreibungen in der sozialen Eindrucksbildung über bergewaltigungsoffer und 7-ter. *Gruppendynamik*, 16, 169-178.
- Krahé, B., 1988, Victim and observer characteristics as determinants of responsibility attributions to victims of rape. *Journal of Applied Social Psychology*, 18, 50-58.
- LaPlante, M. N., McCormick, N., & Brannigan, G. G., 1980, Living the sexual script: College students' views of influence in sexual encounters. *Journal of Sex Research*, 16, 338-355.
- Linz, D., Donnerstein, E., Bross, M., & Chapin, M., 1986, Mitigating the influence of violence on television and sexual violence in the media. In R. J. Blanchard & D. C. Blanchard (Eds.), *Advances in the study of aggression, Vol. 2*. New York: Academic Press, Pp.165-194.
- Lowry, D. T., Love, G., & Kirby, M. R., 1981, Sex on the soap operas: Patterns of intimacy. *Journal of Communication*, 31, 90-96.
- MaCkwellar, J., 1975, *Rape*. New York: Crown.
- (権寧(訳)、1976、『レイフ(強姦):異常社会の研究』現代史出版会)
- Malamuth, N.M., 1981a, Rape proclivity among males. *Journal of Social Issues*, 37, 138-157.
- Malamuth, N.M., 1981b, Rape fantasy as a function of exposure to violent sexual stimuli. *Archives of Sexual Behavior*, 10, 33-47.
- Malamuth, N.M., 1983, Factors associated with rapes as predictors of laboratory aggression against women. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, 432-442.
- Malamuth, N.M., 1984, Aggression against women: Cultural and individual causes. In N.M. Malamuth & E. Donnerstein (Eds.), *Pornography and sexual aggression*. New York: Academic Press, Pp.19-52.
- Malamuth, N.M., 1986, Predictors of naturalistic sexual aggression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 953-962.
- Malamuth, N.M. & Briere, J., 1986, Sexual violence in the media: Indirect effects on aggression against women. *Journal of Social Issues*, 42, 75-92.
- Malamuth, N.M. & Check, J. V. P., 1980a, Sexual arousal to rape and consenting depictions: The importance of the women's arousal. *Journal of Abnormal Psychology*, 89, 763-766.
- Malamuth, N.M. & Check, J. V. P., 1980b, Penile tumescence and perceptual responses to rape as a function of victim's perceived reactions. *Journal of Applied Social Psychology*, 10, 528-547.
- Malamuth, N.M. & Check, J. V. P., 1981a, The effects of exposure to aggressive pornography: Rape proclivity, sexual arousal and beliefs in rape myths. Paper presented at the 89th annual meeting of the American Psychological Association, Los Angeles, CA.
- Malamuth, N.M. & Check, J. V. P., 1981b, The effects of mass media exposure on acceptance of violence against women: A field experiment. *Journal of Research in Personality*, 15, 436-446.
- Malamuth, N.M. & Check, J. V. P., 1983, Sexual arousal to rape depictions: Individual differences. *Journal of Abnormal Psychology*, 92, 55-67.
- Malamuth, N.M. & Check, J. V. P., 1985a, The effects of aggressive pornography on beliefs in rape myths: Individual differences. *Journal of Research in Personality*, 19, 299-320.
- Malamuth, N.M. & Check, J. V. P., 1985b, Predicting naturalistic sexual aggression: A replication.

- Unpublished manuscript, University of California, Los Angeles.
- Malamuth, N. M., Check, J. V. P., & Briere, J., 1986, Sexual arousal in response to aggression: Ideological, aggressive, and sexual correlates. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 330-340.
- Malamuth, N. M. & Donnerstein, E., 1982, The effects of aggressive erotic stimuli. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol. 15. New York: Academic Press, Pp.103-136.
- Malamuth, N. M., Haber, S., & Feshbach, S., 1980, Testing hypothesis regarding rape: Exposure to sexual violence, sex differences, and the "normality" of rapists. *Journal of Research in Personality*, 14, 121-137.
- Malamuth, N. M., Heim, M., & Feshbach, S., 1980, Sexual responsiveness of college students to rape depictions: Inhibitory and disinhibitory effects. *Journal of Personality and Social Psychology*, 38, 399-408.
- Marshall, W. L. & Barbaree, H. E., 1984, A behavioral view of rape. *International Journal of Law and Psychiatry*, 7, 51-77.
- 大淵憲一、1980、暴力映像が視聴者の行動に及ぼす効果について。実験社会心理学研究、20、85-95。
- 大淵憲一、1990、『性と暴力：性的覚醒の攻撃行動に及ぼす影響』
- 大淵憲一・石毛博・山入端津由・井上和子、1985、レイプ神話と性犯罪。犯罪心理学研究、23、1-12。
- Presidential Commission on Obscenity and Pornography, 1971, *Report of the Presidential Commission on Obscenity and Pornography*. Washington, D. C. : U. S. Government Printing Office.
- Quinsey, V. L., Chaplin, T. C., & Upfold, D., 1984, Sexual arousal to nonsexual violence and sadomasochistic themes among rapists and non-sex offenders. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 52, 651-657.
- Quinsey, V. L., Chaplin, T. C., & Varney, G., 1981, A comparison of rapists and non-sex offenders' sexual preferences for mutually consenting sex, rape, and physical abuse of women. *Behavioral Assessment*, 3, 127-135.
- Rapaport, K. & Burkhart, B. R., 1984, Personality and attitudinal characteristics of sexually coercive college males. *Journal of Abnormal Psychology*, 93, 216-221.
- 佐藤欣子・杉原紗千子、1978、強姦事犯の実態、法綜研究、141-156。
- Taylor, S. P. & Epstein, S., 1967, Aggression as a function of the interaction of the sex of the aggressor and the sex of the victim. *Journal of Personality*, 35, 474-486.
- Tieger, T., 1981, Self-reported likelihood of raping and the social perception of rape. *Journal of Research in Personality*, 15, 147-158.
- Turner, C. W. & Layton, J. F., 1976, Verbal imagery and connotation as memory induced mediation of aggressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 33, 755-763.
- Yates, E., Barbaree, H. E., & Marshall, W. L., 1984, Anger and deviant sexual arousal. *Behavioral Therapy*, 15, 287-294.
- Zillmann, D. & Johnson, R. C., 1973, Motivated aggressiveness perpetuated by exposure to aggressive films and reduced by exposure to non-aggressive films. *Journal of Experimental Research in Personality*, 7, 261-276.

(1990年2月21日受稿、1990年12月21日掲載決定)